

《特別講演》

ラジオ生放送現場から見たメディアの変遷と今後の英語教育の可能性

佐藤弘樹 (α-Station FM Kyoto パーソナリティー)

マスメディアの激変期であるこの四半世紀をラジオの生放送現場から見つめてきた。私の番組は平日月曜日から金曜日の朝 7時から 10時の生放送だが、ある女子学生から「佐藤先生の番組は途中から始まる」と言われたことがある。彼女曰く「私が起きる 7時半に番組はすでに始まっており途中から聞くことになる」という。彼女は YouTube 等を想定している。自分の生活を放送メディアの進行スケジュールに合わせるのではなく、自分の生活スケジュールに合わせてメディアを活用したい。このことがメディアを放送から通信へと変貌させた。つまりラジオ放送をラジオ受信機ではなくスマホで聞く人が多くなった。これが現代社会のメディアを取り巻く実相である。

大きな変化は見えにくいというが、これが働き方改革の下での労働環境や大学の改革が急がれる理由でもあるのだろう。

今や外国語習得の電子化・機械化は急速に進んでいる。

こうした時代にあって世間の求める語学力とは何かと考えると、それは言葉の持つ知性と感性と適性の習得に集約される。一言で言うなら「ものの言い方」と言い換えてもいいだろう。

テレビもラジオもマスメディアは意識的にこの四半世紀の間で放送上の「ことば」を変えてきた。より平易にし、命令形や「上から目線」を嫌い、断定的な物言いを避けてきた。講演当日にはそうした実例を提示したい。

母語の日常会話が単純化・平準化する中で、求められる外国語の運用能力には想像力が欠かせない。上記の彼女曰く「ラジオは難しい」という。テレビと違ってラジオは音声のみで映像の助けがない故だろう。

今や誰もが瞬時にして必要な知識を得られるような夢の世界が出現している。

しかしながらその反面、人の知的興奮の度合いは下がってしまった。未知の知識を獲得することの興奮にワクワクする感動はもはや望むべくもない。

そうした中であって未来的な想像力を駆使した英語教育とは何か、その在り方を考えてみたい。

《シンポジウム》ノンフィクション素材の活用法

ドキュメンタリーを使って養う批判的思考能力

玉井史絵（同志社大学）

本発表では、ドキュメンタリー映画を用いた授業の実践報告を通じて、ドキュメンタリーがいかに英語の能力と共に批判的思考能力を高めていく教材として有効であるかを論じたい。本発表は発表者が2017年度秋学期に関西の私立大学の3年次対象の演習クラスにおいて行った実践に基づいている。このクラスは留学経験がある少人数の学生を対象とし、ドキュメンタリーを通して社会を批判的に考察する能力を養うことを目的としていた。今回は特にその中でも Louie Psihoyos 監督の *The Cove* を取り上げる。この映画は周知のとおり、和歌山県太地町のイルカ捕鯨を批判的に描いたドキュメンタリーであるが、その描き方が現地の文化に対する偏見や誤解に満ちているとして、日本国内では大きな批判が巻き起こった。授業では、まずドキュメンタリー映画の特質や、〈文化〉を表象するという営為における問題点などについて議論し、受講生の考えを深めた。その後 *The Cove* を鑑賞し、この映画を通して Psihoyos 監督がいかに〈日本文化〉を表象しようとしているのかを議論した。本発表の前半ではこうした授業の実践報告を行い、後半では本授業での実践をどのようにして一般的な英語のクラスへ応用できるかについて考察したい。

ドキュメンタリーの日本語字幕作成を通して学ぶ複数の視点と文化翻訳

齋藤安以子（摂南大学）

本発表では、短いノンフィクション番組の日本語字幕作成という学習活動を用いた授業の実践報告を通じて、ドキュメンタリー教材がいかに社会問題の理解と文化翻訳の意識を、英語の能力と共に高めていくかを論じたい。この発表は発表者が2018年度前後期に担当した関西の私立大学2年次対象のESPクラスでの実践に基づく。英語専攻ながらほとんど留学経験のない20名前後の学生を対象とし、学力ではなく卒業後の志望キャリアの大まかな分類でクラス分けをしている。今年度は「災害被害者」「難民」という、履修者の多くは自分なることを想定していない状況がテーマで、ノンフィクションのインタビューや報道とフィクション（演劇台本：シリアから英国への難民の少年が主人公）を併用した。授業では、教員も含めて皆、テーマについて詳しくないなりに根拠のない思い込みがあるということを自覚し、できるだけ複数の視点から出来事について情報を集め、考え、わかりやすく偏らない日本語字幕にするための検討を重ねた。その結果、「まちがいのない英文和訳」ではなく、「背景を考え、伝えるための文化翻訳」も範疇に入れて翻訳するようになった。発表では、東日本大震災の被災者支援に関わる日系3世の青年へのインタビュー動画 (<https://www.youtube.com/watch?v=bXu6J20XtXs>)、および UNHCR 作成の

英国に渡った難民が母国の特産のチーズを英国で製造・販売して自立したケース紹介の番組（<https://www.unhcr.org/news/stories/2018/4/5ac632a94/syrians-squeaky-cheese-hit-british-consumers.html>）の日本語字幕作成の過程とその学習効果について述べる。さらに、英語教材としてのドキュメンタリー素材の検討への留意点を考察する。

《企画ワークショップ》

Authenticating In-class Activities Using Multi-media

Makoto IMURA (Osaka Institute of Technology)

William FIGONI (Kindai University)

Sae MATSUDA (Setsunan University)

本ワークショップでは、発表者が授業で用いた映像素材やアイデアをいくつか紹介し、会話やロールプレイなどの授業内活動を活性化させる方法について考えていきたいと思う（進行は適宜日本語と英語を織り交ぜて行う）。第一発表者（松田）は、『チャーリーとチョコレート工場』からの一場面を用い、単調になりがちな会話練習にちょっとした小道具を加えるだけで、情景をよりリアルにイメージし、発話やジェスチャーに活かすことができる例を紹介する。第二発表者（井村）は、ゼミ（非英語専攻）で英語学習法研究をテーマに、学生が面白いと思う英語学習法を発表させているが、その中から、人気アニメ『ジョジョの奇妙な冒険』を題材にした会話教材を紹介する。現実にはありえない荒唐無稽なストーリーであるが、セリフに感情移入しやすく、ヴォイス・オーバーすることで楽しみながら会話の練習ができる。第三発表者（フィゴニ）は、日常的な発話行為でありながらほとんど教科書で取り扱われることがない「嘘」を取り上げる。日常のコミュニケーションの中で嘘がどのように使われているのかを映像メディアを使って示すとともに、face-saving act として嘘を用いたロールプレイの例を紹介する。映画中の会話には、言語的な注目点のみならず社会的・文化的側面も含まれており、多様な切り口が考えられることも魅力である。単発の投げ入れ教材としても有効なのではないかと考える。

No other profession would be more rewarding than teaching if only our students actively engage in class activities and enjoy learning with sparkling eyes. How can we make this happen? What are the points of consideration? Are there any effective techniques? We believe these are common concerns of all teachers struggling to vitalize learning that takes place in their classrooms. This workshop approaches these questions from the perspective of authentication. Each facilitator will show a few examples of his/her class activities to provide hints for later discussion and group work to create original learning activities using the props that the facilitators will provide.

The first speaker, Sae Matsuda, talks about visualizing a scene from *Charlie and the Chocolate Factory* by using a small prop. The second speaker, Makoto Imura, introduces one of his seminar classes in which the students enthusiastically engaged in voicing over the conversations in *Jojo's Bizarre Adventure*. The final speaker, William Figoni, reports that using clips from films, TV programs, and Podcasts, we can show students how deception is used in communication. Lying is rarely covered in textbooks but is a common speech act. In the classroom, teachers and students' role play vignettes to learn and experience how deception is used to "save face."

《支部間交流発表》

映画の台詞利用による語句の認知意味論的多義理解について―「中心的概念」理論の観点から―

松中完二（久留米工業大学）

認知意味論の世界では、意味現象を人間の認知構造の中において捉える。ここではあくまで意味認識を行う人間の理解の過程と、そこで共有される意味の解釈といった部分をどう記述し、分析するかという点に注意が向けられる。認知意味論で共通して取られる語の多義性に関する立場は、Lakoff（1987）、Sweetser（1990）、Taylor（1995）等が指摘するように、語の多義性は“中心となる意味から非一様な広がりを見せるカテゴリーの拡張”と考えられ、それを中心にしたメタファー等の認知的原理によって意味の拡張を生み、それがネットワーク上に中心から周辺へと拡張することで語の多義性を引き起こすという視点に立つ。

発表者はこれまで20年以上にわたって日英語の多義現象とその原理の解明にあたってきたが、結果的にそこで明らかになったのはColombo & Flores（1984）が主張するように、語や句の多義性の様々な意味の間の相互関連性を扱うのに最良の方法は、多義を生み出す一つまたは複数の中核的な意味があり、その他に周辺的な意味が派生するという考えをはずかなくも実証する結果であった。そして多義の発生には場面の要素が欠かせない。また意味研究は理論が先にありきの演繹ではなく、実際の用例から得られた現象の帰納的手法によるものでなければならない。そのため、映画の台詞はこうした多義研究の用例として大変有益である。

本研究発表では意味研究の入り口として一般にも広く理解を広める目的で、これまで発表者が行ってきた研究と、そこで展開してきた「中心的概念」という考えを基に、映画の台詞を利用してtake care of～を例にその多義を生み出す中心的概念と、そこから派生する多義的意味認識を提示し、その認知原理について解明を試みる。

《支部間交流発表》

医学科の EMP 教育における映像メディアの活用：学年別ニーズを探る

南部みゆき（宮崎大学）

本発表では、医学を目的とした EMP（English for Medical Purposes）教育で取り入れてきた映像メディアの活用例をいくつか紹介する。具体的には、医学科1年生（基礎教育科目・専門基礎科目）、2年生（基礎教育科目）、4・5年生（専門基礎科目）の授業内での活用例、そして課外での6年生向けの取り組み例を紹介する。1年生の授業では、「早く医学の勉強をしたいのに」という学生の“渇き”を少し癒すことを目指し、解剖学・生理学・病理学を広く浅く織り交ぜながら、複数の映像メディア（医療チュートリアルビデオ、映画など）を取り入れた。2年生では、精神的にも肉体的にも追い込まれる肉眼解剖実習の予習の一助となることをねらいとし、医療チュートリアルビデオの他、米国の医学校が公開している剖出手技の映像等を活用した。4・5年生では、海外臨床実習を目指す学生向けに実施している授業で取り入れた、米国の医療ドラマや TED の活用、そして6年生の医師国家試験対策用あるいは米国医師国家試験（USMLE）の勉強用として、学生とともに試作を始めた海外電子版ジャーナルを利用した画像診断英語クイズを紹介する。

発表者が今思うことは3つある。まず、映像メディアは今後ますます教育的価値の広がり期待できるツールだと言って間違いのない、ということである。次に、「学生の“今”のニーズは何か」の視点が大前提だということである。過密化する専門授業を受ける学生が医学英語に対して抱くニーズは何か、学年別にニーズの違いはあるか、を「学生に直に」問い続けなくてはならないと感じている。最後に、「英語」と「医学」の橋渡しをする EMP 教員としては、教員もある程度基礎的な医学知識を英語で身に付ける努力が時には必要ではないか、ということである。その意味では、映像メディアは教員にも欠かせない学習ツールである。その学習は決して無駄ではない。教員は学生がいてこそ、だからである。

《研究発表・実践報告》

＜研究発表＞

テレビドラマの日常性とドラマ性を計る分析手法について

田畑圭介（神戸親和女子大学）

テレビドラマ *Friends*、*LOST* および The Bergen Corpus of London Teenage Language (COLT) の口語コーパスを使って、各コーパスの日常性、ドラマ性といった特徴を計る分析手法について考察する。McIntyre and Walker (2010) は男女の発話数の違いから作品の特徴を探っているが、男女の発話数、さらにはあいまい表現 (kind of, sort of, or something (like that), or anything (like that), (and) stuff (like that), probably, might) や感情表現 (really really, totally, of course, damn, damn it, goddamn, bastard, bitch(y), son of a bitch, sack, ass, crap(py)) の頻度差から口語コーパスの特徴が導きだせる可能性について論じていく。本発表の帰結として日常らしさの度合いでは、COLT > *Friends* > *LOST* となり、ドラマ性の高さでは、*LOST* > COLT > *Friends* となることが示される。また *LOST* は質問に対する返答率が *Friends* よりも高く、登場人物の対話の内容が理解しやすくなるよう配慮されていることも明らかとなる。*LOST* のセリフ表現自体は明白で十分な情報提供を行っていることから、*LOST* は場面設定と映像描写によってミステリー感が表現されているテレビドラマであると帰結される。Bednarek (2018) は、英語教育の視点でテレビドラマの言語的特徴を認識する重要性について論じている。本発表で帰結される日常性、ドラマ性の指標をもとにテレビドラマを選別することで、日常英会話教材としてどの作品のセリフ群が適切であるか判別できることになる。

< 実践報告 >

Creating online video to enhance student learning

Naoko Kaneda POON (Kyoto Women's University)

Ken Wing POON (Freelance)

In this presentation, we'd like to propose some benefits of creating and using your own video material in class. Video is the most powerful form of multimedia that is easily accessible by students. Also, by creating videos as a supplement to your lessons, you can create content that focuses directly on the needs of your students.

Our students are digital natives. Many of them have grown up, surrounded by the internet and smart phones. According to a survey in 2017 taken by Ministry of Internal Affairs and Communications, teenagers and people in their 20s spend over 2 hours to use their smartphones. Kaneda Poon took a survey in her class and the results show that nearly all students responded that they use YouTube, a social media platform heavily focused on video content. Kaneda Poon proposes the question, "what if we can get our students to use some of this time to review or learn?"

With these facts in mind, we would like to combine in-class lessons and the student's interest in social media sites. This combination of face to face classroom times and the use of technology is called blended learning. According to Bersin (2004), 'blended learning is the combination of different training "media" (technologies, activities, and types of events) to create an optimum training program for a specific audience.'

We created a video based on the materials that students were learning in their English curriculum. Then we showed it to the students and answered questions that were asked in the video. Next, we did speaking practice, using the dialogue from the video. Afterwards, we took a survey, asking students if they found teacher-created videos effective to reach their educational goals.

On the survey, we got a lot of positive feedback. One student wrote, "It's a good idea to practice at a native speaker's speed. I feel more comfortable learning from someone I know, than from a stranger on YouTube." Another student wrote, "I can learn more with videos like that. It's difficult to practice pronunciation from only using a CD." These comments show that creating videos in the style that students are already familiar with can resonate more strongly with them than a traditional classroom lesson.

<研究発表>

The Big Bang Theory, Sheldon Cooper の発話から考えるポライトネス・ストラテジー

松井夏津紀（京都外国語大学）

対人コミュニケーションにおいて、話者と対話者は会話を円滑に行うべく、意識的、あるいは無意識にポライトネスに配慮している。我々は日常的に、話者が対話者と積極的に関わろうとする「ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」と、対話者と距離を置くために用いる「ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー」（Brown & Levinson, 1978）を用いて、話者と対話者の互いの「フェイス（face）」（Goffman, 1967）を維持することに努めている。

本発表では、アメリカの TV シリーズ *The Big Bang Theory* (2007-) の主要登場人物である Sheldon Cooper の発話を分析することにより、日常会話におけるポライトネスについての考察を行う。本シリーズは、コミュニケーション力の乏しい「オタク」と分類される科学者である登場人物たちの発話が、一般的に聞き手が期待している発話行動と異なっていることから笑いが起こるシチュエーション・コメディである。その中でも、変人扱いされている天才物理学者の Sheldon の発話行為は、規範的な発話行為と乖離しているため、特に視聴者の笑いを誘うポイントとなっている。一般的な日常会話では、社交辞令や皮肉表現のような話者の真意とは表面的に異なる発話がされることは珍しくない。しかし、Sheldon は社交辞令を用いるスキルを持ち合わせておらず、真意が常に発話行為となり、また対話者の発話は文字通りにしか理解できないため、皮肉の真意を理解することはない。

本発表では、Sheldon の発話行為が笑いのポイントとなっているシーンを取り上げ、Grice (1975) が述べた「協調の原理」(Cooperative Principle) の 4 つ指針である「量の公理」、「質の公理」、「関係の公理」、「様態の公理」のどの指針に違反しているのかを調査し、Sheldon の発話がどのように対話者のフェイスを脅かしているのかという点を考察する。また、Sheldon の発話行為を分析することから、日常会話ではどのような条件下でポライトネス・ストラテジーの使用が成立するのかについて言及する。

<実践報告>

映像を用いた TOEIC リスニング意図問題の指導について

蘆寛美 (京都産業大学)

福井美奈子 (京都産業大学)

TOEIC® Listening & Reading Test が 2016 年 5 月の公開テストより新形式となった。それにとともに、新形式に対応した各パートの効果的な解き方や指導法もひとつおりに出揃ってきた。しかし、Part 3 や Part 4 で出題される意図問題の指導は、難しいのが現状である。

意図問題とは、会話やトーク中の一文を抜粋し、その一文が話者のどのような意図を表しているのかに答えるリスニング問題である。文脈を理解し、コミュニケーション能力が問われるため、日常的に英語でコミュニケーションをとる機会が少ない学生にとってはハードルが高い問題である。また、会話やトークのどの段階で抜粋された文が生起するのか予想がつかない点も、設問に解答しづらくしている。

ある大学での調査の結果、意図問題に解答する際、学生は抜粋された英文を指導担当者か思っても見なかった捉え方をすることが分かった。一例として、“Oh, don't thank me.”を挙げる。“Thank you.”の意味は当然理解していたものの、89%の学生が“hank”の意味を知らないことが分かった。また、“Oh, don't thank me.”の意図を問う設問に確信を持って解答をした学生は、0%であった。また、“How could you miss this?”や“You can't miss it.”については、“miss”の意味を「ミスを犯す」と捉えてしまう学生がいた。これらの要因として、抜粋された文が、どのような状況のやりとりで使用されるかについての理解ができていないことが考えられる。

本発表では、TOEIC リスニング意図問題の出題傾向を分析し、学生が間違えやすいポイントを挙げる。そして、映画『愛と青春の旅立ち』(*An officer and a gentleman*, 1982) などの映画を使用し、抜粋文が使用される状況を学生に理解させるツールとして、映像を使用する指導法を検討したい。

<実践報告>

TED talk を用いた TILT (Translation in language teaching) 実践

ラムズデン多夏子 (京都外国語大学)

外国語教育において訳の使用は否定的に捉えられてきたが、Translation in Language Teaching (以下「TILT」) の代表的な提唱者である Guy Cook が、翻訳は言語意識かつ言語使用の発達に重要な役割を持ち、現代のグローバル化および多文化化が進展する社会に必要な技能である (Cook, 2010) と主張するように、翻訳は活用次第で、外国語学習者の言語能力向上に有効だと考えられる。そこで発表者は、動画の日英スクリプトと日本語字幕に注目し、映画や動画配信サイトを活用した学習法の提案を目的に授業内アクティビティを開発した。

本発表は、動画を活用した TILT 実践の取組として、英米語学科の大学生 (2-4 回生) に行った日英翻訳の授業 (2 クラス合計 57 人) の実践報告である。日本語と英語のスクリプトが入手しやすい TED Talk を使用し、個人ワークとペアワークを組み合わせた語彙学習、日英翻訳、ディクテーションの 3 活動を行なった。今回はその前半部分の語彙学習について発表する。

この語彙学習は、日本語字幕を見ながら映像を視聴し、英語を聞きとるアクティビティである。まず個人ワークでは、学習者が個人のスマートフォンを使い、覚えたい英語の表現を、日英等価ペアにしてハンドアウトに書きとる。その後ペアワークで、二人が各々集めた日英等価ペアのうちベスト 10 を選び Google Form で提出する。これを教師がエクセルに日英等価表現集 (CTD: class translation database) としてまとめ、この後の日英翻訳やディクテーションの参考資料とする。

CTD は、翻訳業界で使われている「翻訳メモリ」(過去に翻訳した原文と訳文のペアを大量に蓄積する翻訳支援ツール) にヒントを得たものである。エクセルを使った日英等価表現集はカテゴリ等目的別に整理できるため、復習や再利用に使いやすい。

本発表では、本アクティビティについて行ったアンケートの結果も紹介し、外国語教育の一アプローチとしての翻訳の有効性を示唆する。

< 実践報告 >

Making speaking visible: using video modelling for conversation instruction and course management

Michael HERKE (Setsunan University)

Todd HOOPER (Setsunan University)

Teaching the spoken language provides a number of challenges, not least of which is the transitory nature of output. Coordinating a department wide curriculum adds to the burden, as it is difficult to monitor the reliability and quality of instruction over tens of teachers and hundreds of students. At Setsunan University, we have been tasked with creating the curriculum for spoken English for all first year students in the English department, as well as managing the part time teachers who deliver the instruction. In order to help fulfill this mandate, we have compiled an interaction-focused textbook based on the claim that NNS-NNS can foster language acquisition (Long, 1996; Mackey & Goo, 2007; Talandis, 1994), but questions remain about the ability of students and teachers to adapt to this centralization. Students may be unfamiliar or uncomfortable with the emphasis on ‘doing’ English rather than only studying it, and teachers may be unsure how to maximize learning with new materials.

In response to these challenges we face in the upcoming 2019-2020 academic year, we have created short videos of students performing communicative tasks and tests from the textbook as models for use by instructors and students. These include typical CEFR A1 activities like describing one’s family, talking about work environment, holiday experiences and future plans (EQUALS, 2011). Video modelling has been used for decades in a variety of fields to help people acquire new skills and behaviors (Dowrick, 1999), based on the theory that some things are better learned through observation (Bandura, 2004). The videos were recorded with a number of goals in mind. 1) To make student oral production visible and analyzable, 2) To provide models of good performance for future students, and 3) To provide clear expectations of course goals and objectives for part time teachers. The Noticing Hypothesis claims that a linguistic feature must be noticed before it can be acquired (Schmidt, 1990). By making speaking visible, replayable and analyzable, students are more likely to recognize what they are doing well in a given task and can quickly notice for themselves what needs to be improved, and instructors can easily refer to models to understand course goals and objectives. Pedagogical implications and future research questions will be discussed.

<実践報告>

映画「ハート・オブ・ウーマン」をもとに考案する広告キャンペーンのアイデア Pitching Advertising Ideas Based on the Movie, “What Women Want”

塩見佳代子（立命館大学）

本発表では、映画 *What Women Want* 『ハート・オブ・ウーマン』を基に、学生が行った広告キャンペーンのアイデア発表の内容を報告する。大学 2 回生以上を対象にした選択英語「メディア英語」クラスでは、複数の映画を題材にし、学生は様々な分野の動向や課題を知ると同時に、各分野で役に立つ英語表現を学ぶ。今回は、広告業界を舞台にして繰り広げられる広告現場の様子を映画で鑑賞すると同時に、広告の批評の仕方、広告の見せ方、広告キャンペーンのコンセプトの作り方、発表の仕方などを学んだ。英語クラスにおいて映画を用いる場合、英語の受信力養成に重点が置かれる場合があるが、できるだけ 4 技能を使うアクティブ・ラーニングのアクティビティを導入した。

学生は映画の内容を把握した後、実際に映画のシーンに映し出される、新しい広告のコンセプトとキャッチフレーズ・スローガンの発表をもとに、各自がそれぞれ新しい広告キャンペーンのアイデアを考案した。具体的には、次の手順に沿って準備をして発表を行った。

- (1) 映画で、女性をターゲットにした Nike の新しい広告キャンペーン発表を見る。
- (2) 特定の顧客層を視野に入れた広告の内容や英語のキーワードを学ぶ。
- (3) 映画と似た設定で、Nike の新しい広告キャンペーンのアイデアを考案する。
- (4) 新広告のキャッチフレーズ・スローガンを立案する。
- (5) 新広告のスローガンと背景面を選んで 1 枚のスライドを作成する。
- (6) 練り上げた広告のコンセプトやスローガンをクラスで発表する。
- (7) 広告のコンセプトやスローガンを音声で録音し、スライドに挿入する。
- (8) お互いの作品に関して、クラス内でコメントを出し合う。

広告キャンペーンのアイデア立案は、経営学部の学生には大変関心のあるタスクであったが、学部を問わず導入でき、企業の広告だけではなく大学やクラブ、イベント紹介などにも活用することができると思われる。創造性と英語発信力を育むアクティビティの一例として実践報告を行う。

